

○宇田川総合病院・中・受付あたり

松沼正造（68）が憤然とした表情でズンズンと歩いてくる。勢い余って他の人にぶつかりそうになると、乱暴に押しつけ、そのまま病院の出口へと向かう。

正造の娘、翔子（32）がその後を追って走ってくる。

翔子「お父さん、ちょっと待ってったら！」

翔子、追いついて正造の腕を掴む。

翔子「ねえ、待ちなよ！」

正造、無言で翔子を振り払い、自動ドアから出ていく。

翔子「なんなのよ、もう！」

○同・自動ドア・外

翔子が出てくる。

歩き続ける正造の後ろ姿が見える。

翔子「（大きく）勉強なんて全然意味が無かったじゃん！」

正造、立ち止まり振り返る。

翔子「今まで、やってきたことはなんだったの？ お父さんが今までやってきたことはなんだったのよ！」

正造の表情が悲しげに歪む。

T「五年前」

○松沼家・外観（早朝）

太陽が昇り始めている。

住宅街にあるごく普通の二階建ての家。

○同・リビング（早朝）

薄暗いリビングに朝日が差し込んでいる。

「退職記念 松沼正造様 金沢重工業株式会社」と書かれた楯がキャビネットの上に飾ってある。

その隣には、ヘルメットをかぶり青い作業服を着た正造の写真。腕を組み、誇らしげに写っている。

○同・庭（朝）

63才の正造が首を回したり、屈伸をしたりの自己流の体操をしている。

○同・キッチン

壁の時計は7時半。27才の翔子が大急ぎで朝食を食べている。

正造の妻、鈴江（60）が庭にいる正造に、
鈴江「（大きく）お父さん、早くごはん食べちゃってよ！」

正造は庭から「ああ」とも「うむ」ともとれる気のない返事をする。

翔子、いまいましそうに、
翔子「もったいぶっちやって。暇人が」

鈴江「（たしなめるように）翔子」

× × × ×

壁の時計は8時過ぎ。

正造が新聞を読みながら、ゆっくりと朝食をとっている。

そこに着替えをすました鈴江がきて、

鈴江「じゃあ、あたしも行ってくるから。あとよろしくお願いね」

正造、新聞を見たまま、

正造「(あいまいに) ああ……む」

× × × ×

時計は9時近い。

正造は、テーブルで新聞を読んでいる。

朝食は片付いておらず、テーブルの上に並んだまま。

正造、ちらりと時計を確認する。

× × × ×

時計は12時半。

正造が一人で昼食の準備をしている。

冷蔵庫から、すでにできている料理を取り出し、レンジに入れるだけが、やはりと手際が悪い。もたもたとラップをはがし、食品をレンジに入れる。

正造「えっと……」

とレンジのスイッチをしばし眺める。

○同・リビング

壁の時計は3時。

正造がテレビのワイドショーを、面白くもなんともないという表情で見ている。

○テレビ画面

MC 役の男性タレントが難しい顔をして、
MC 「しかし、二人きりで一晩過ごしておいで、何もなかったというのもどうなんでしょうね？」

そう話を振られたコメンテーターたちも
一様に難しい顔をしている。

○松沼家・リビング

無表情にテレビを見る正造。

ちらりと時間を確認する。3時2分。

正造、小さくため息をつく。

○同・キッチン(夜)

翔子と鈴江が夕食をとっている。

翔子は風呂上がりで髪の毛が濡れている。

翔子「お父さんは？」

鈴江「疲れたから寝るって」

翔子「もう？ 疲れたって、あの人毎日何を
してるの？」

鈴江「首をかしげ」さあ？」

翔子「偉そうにしてるわりには無趣味だから
ね、あの人」

鈴江、ニコニコと翔子を見ている。

翔子「何？」

鈴江「笑って」やっぱり親子だねえ」

翔子「なにがさ？」

鈴江「二人とも意地っ張りで頑固で。そうい
うところが、ホントそおーくり」

○同・庭（翌朝）

正造が庭で自己流の体操をしている。

鈴江の声「ねえ、あなた、早く朝ごはん食べ
ちゃってよ！」

正造、聞こえているはずなのに返事をせ

ず体操を続ける。

○同・キッチン

朝食を食べ終えた翔子が立ち上がる。
そこにゆっくりとやってくる正造。

鈴江「もう毎日、毎日、手間をかけさせない
でよ」

正造「(あいまいに) ああ……む」

翔子、立ったまま正造を見ている。

正造「(翔子に) なんだ？」

翔子「お父さんさ、毎日何してるの？」

正造「何って……いろいろだよ」

翔子「図書館にでも行ったら？」

正造「なんで？」

翔子「毎日、暇にしてるんだっただらさ」

正造「いや、別に暇になんてしとらんぞ」

翔子「(笑って) そうかな？」

正造、翔子に向き直り、

正造「お前はな、人の心配をする前に、自分
の心配をしたらどうだ？ いい歳をしてい

つまでも——」

鈴江「(かぶせて) 翔子、遅刻するよ！」

翔子「ハイ」

と正造を相手にせず、出ていく。

ムツとした表情の正造。

× × × × ×

鈴江も着替えが済んでいる。

正造は、新聞を読みながらゆっくりと食事続けている。

鈴江「じゃあ、あたしも行ってくるから」

正造「(新聞を見たまま) ああ」

鈴江、キッチンを出る。

正造、壁の時計を見る。 8時20分。

正造「なあ？」

鈴江の返事はない。

正造「(大きく) おい、鈴江！」

鈴江、戻ってきて、

鈴江「なによ？ もう行かないと」

正造、新聞に目をやったまま、

正造「図書館でどこにあるんだ？」

とさりげない調子で聞く。

鈴江、まじまじと正造を見ている。

正造「（顔を上げ、鈴江を見て）なんだ？」

鈴江「（笑って）行くの？ 図書館？」

正造「ただ、聞いてみただけだ。で、どこにあるんだ？」

鈴江「てゆうか、場所、知らないの？」

正造「知らんから聞いてるんだ」

鈴江「市役所の隣でしょう。市役所の場所は知ってる？」

正造「それくらいは知ってる！」

○市役所・前

正造が市役所の前に立ち、その建物を見上げている。

そこから右方向に首を回していく。

そこに三階建ての立派な図書館がある。

正造、「へえ」という表情。

○図書館・中

図書館の中を正造が歩いている。

顔に笑顔が浮かんでいる。ときおり足元を見て、カーペットの感触を楽しんでいるよう。

机やソファに、正造と同世代と思える人たちが読書をしている。

「なるほど」とうなずく正造。

× × × × ×

ソファに座り、正造が本を読んでいる。

ふと顔を上げ壁の時計を見る。

午後の2時。

わずかに驚いた顔をして、そして笑顔になる。

○同・受付カウンター

正造が貸出カウンターに本を持ってやってくる。

正造「あの……本を借りるにはどうすればいいのかな？」

○松沼家・キッチン（夜）

夕食後。翔子と鈴江がお茶を飲んでいる。

翔子「じゃあ、それで本まで借りてきたんだ」

鈴江「笑って」そう。それで『なかなかいい』

所だったぞ。お前も行ってみたらどうだ？」

だって」

翔子「苦笑）偉っそうに」

とリビングで本を読む正造を覗きこむ。

正造は老眼鏡をかけ、こんこんと読書をしている。

○図書館・受付カウンター

正造が、六冊の本をカウンターに積む。

正造「これ返却で」

係員「はい」

×

×

×

×

正造が、六冊の本をカウンターに積む。

正造「これ、お願いします」

と本の上に貸出カードを置く。

○松沼家・リビング

真夏の日差し。蝉が鳴いている。

孫の健太（4）が正造にまわりついて
いる。正造に抱きつき、背中によじ登ろ
うとしている。

そんな様子を翔子、鈴江、そして松沼栄
治（32）とその妻の美紀（30）がニコニ
コと見ている。

健太「おじいちゃん、もつと本気で戦ってく
れよ！」

正造「（疲れて）健太、もう勘弁してくれ。そ
うだ、これからじいちゃんと一緒に図書館
に行くか？」

健太「いいよ、図書館なんて！」

翔子「よし、じゃあ健太、お姉ちゃんとトラ
ンプでもしようか？」

健太「うん！」

正造、やれやれといった顔で立ち上がる。

正造「（翔子に）よし、頼んだぞ。（鈴江に）

じゃあ、行ってくる」

栄治「なんだ父さん、図書館なんて行くようになったんだ？」

正造「ああ、読書はいいもんだぞ。健太にも読書の良さを教えてやってくれ。それが親としての役目ってもんだ」

栄治「(苦笑) ああ」

正造、出ていく。

翔子、いまいましそうに

翔子「相変わらずの大きなお世話」

鈴江、栄治、美紀が苦笑する。

翔子「価値観の押し付け」

美紀「(笑って) 相変わらず結婚しろってうる

さく言われてるの？」

翔子、首をかしげ考え込む。

翔子「……そういえば最近あんまり言われな
いような気がするな。どうしちやっただ
ろう？」

○図書館・中

「夏休みお話し会」のポスターが貼ってある。

正造、本を手に読書エリアに行くが、机やソファは子供や学生でいっぱいである。子供たちがちよこまかと書架の間を走り、遠くからは幼児の泣き声が聞こえてくる。正造、顔をしかめ、ため息をつく。

○同・カウンター

正造が司書（女性）に近づき、

正造「（苦笑）夏休みは読書という雰囲気にならないね」

司書「（ニッコリ）文政大学の図書館に行かれただらどうですか？」

正造「大学……の図書館？」

司書「はい。市民の方なら登録すれば利用できます。雰囲気があつて、とても素敵な図書館ですよ」

○文政大学・正門付近

正造が、キョロキョロとしながら正門をくぐっていく。そして、構内の案内板で

図書館の場所を確認している。

○同・図書館・前

葛の絡まったレンガ造りの歴史を感じさせる外観。

正造が感動した面持ちで、その建物を見上げている。

○同・入口・中

正造、天井を見上げる。

天井が高く、梁がアーチ状になっているなど、意匠に歴史と風格がある。

正造「(感嘆) ほう……これは」

○同・受付カウンター

女性職員が貸出カードや利用規約などを正造に渡し、

職員「こちらが貸出カードと利用規約になります。本は、今日から借りることができますから」

正造「どうも」

とカードなどを受け取り、書架へと向かう。そこは背の高い書架がずらりと並ぶ圧倒的な光景。

それを見てかすかに身震いする正造。窓から差し込む日差しが正造を包む。それは、まるで何かの啓示のよう。

○書架の中

一転、正造の表情が悲しげである。

視線の先には「解析力学」「非線形波動」などの難しいタイトルの書物。

× × × × ×

正造、「エコノメトリクス入門」という本を手にとり開く。が、すぐに淋しそうに本を閉じ、書棚に戻す。

書棚を見渡し、ため息をつく。

× × × × ×

正造、教育関連の書籍を見ている。

「教育心理学」や「西洋教育史」など、

やはり難しそうな本ばかり。

一角に小中高で使われている教科書の書棚がある。

正造、あたりを少し気にしてから、小学生の歴史教科書を手に取る。
顔に笑顔が浮かぶ。

○閲覧席

正造が、小学生用の算数の教科書をパラパラと読んでいる。

そして、とある問題を見て、腕組みをして考え始める。

○同・カウンター

正造が来て、カウンターの職員に、

正造「あの……この大学に売店というか、ノートとか売ってる所はあるのかな？」

○閲覧席

ノートを広げ、正造が算数の問題を解い

ている。まるで何かにとりつかれたようにせつせと問題を解き続ける。

○松沼家・キッチン（夜）

鈴江と翔子が夕食を作っている。

そこに書店の大きな紙袋を抱えて正造が帰ってくる。

鈴江「おかえりなさい」

翔子「ずいぶん遅かったね？」

正造「ああ。ちよつと本屋に寄つてたから。

栄治たちは帰つたのか？」

翔子「また来るつてさ。（正造の抱えた包みを見て）なあに、借りるだけじゃ物足りなく

なつちやつたの？」

正造「うん、まあ教科書をちよつとな」

翔子「教科書？」

○同・リビング

正造が、買ってきた教科書などをリビングのテーブルにひろげている。

小学生の理科や算数。そして、中学生の英語の教科書などがある。

翔子、クスクスと笑いだし、

翔子「お父さん、本気？」

正造「なにが？ 俺はこう見えても、やればできる男なんだ。少し、こう……勉強をしてみたくなっただけ」

翔子が、正造の顔をまじまじと見ている。

正造「なんだ？ なんか言いたいことがあるのか？」

翔子「(笑顔)ううん、すっごいいいことだと思っただけ。頑張っただけ！」

○同・書斎

机に向かって正造が算数の問題を解いている。

そこにノックをして翔子が入ってくる。

手には何冊の本とCD。

翔子「お父さん、英語の勉強もするつもりなんじゃない？ どうせやるなら話せるよう

にならないとね」

とそれらを机の上に置く。

翔子「とりあえず、あたしの持つてる中から
やさしそうなものを持ってきた」

正造「おお、すまんな」

と本を手にとりパラパラと開く。

翔子「英語を話せるようになりたいなら練習
しないとね。勉強というより練習。声に出
さないで英語は絶対上達しないから」

正造「なるほど、そういうものか」

翔子「うん。理屈がわかっても楽器がひける
ようにならないのと同じ。とにかく習うよ
り慣れるだからさ」

正造「(笑顔) わかった。ありがとう」

翔子「うん。じゃあね」

と出ていこうとする。

正造「翔子」

翔子「(振り向いて) なあに？」

正造「お前、もう英語の勉強はしてないのか？

前に、翻訳の仕事がやりたいって言った

だろう？」

翔子「うーん、まあ、あの世界もなかなか厳しいしね。そんな簡単にはいかないよ」

正造「あきらめたら、そこでおわりだ。少しづつでいいから勉強を続けたらどうだ」

翔子、少し不思議そうな顔で正造を見て、
そして笑顔になる。

翔子「そうだね。でもさ、てことは結婚はしなくてもいいってこと？」

正造、少しだけ渋い表情。

正造「それとこれとは……（笑って）まあ、好きにしろ。人それぞれだ」

翔子、驚いた表情で正造を見る。

正造「なんだ？」

翔子「（笑って）ううん、別になんにも」

○文政大学・正門付近

リュックを背負い、正造がきびきびと正門をくぐっていく。耳にはイヤホン。携

帯音楽プレイヤーからは英会話の音声がか

聞こえてくる。

それに合わせ英文を口にする正造。

そんな様子を見て、通り過ぎる学生がクスクスと笑うが、正造は気にしていない。

○同・図書館・閲覧室

正造が解いているのは算数ではなく中学生の数学。生き生きと楽しそうに問題を解いている。

○同・リビング（夜）

翔子と鈴江がいる。

テレビで放送しているのは紅白歌合戦。

翔子「（苦笑）受験生じゃないんだから、大み

そかくらい勉強休めばいいのに」

鈴江「あの人は凝り性だから」

翔子「それにしたって」

と立ち上がり、正造の退職記念の楯や青い作業着を着た正造の写真を見る。

○同・書斎（夜）

正造がスピーカーから聞こえてくる英語の音声に合わせて英語を読みあげている。うまく言えない所は、リピート機能を使い何度も繰り返し練習を続ける。

○同・リビング

翔子、正造の写真を見ながら、

翔子「（笑って）ま、お父さんらしいか」

○松沼家・リビング

真夏の日差し。蝉の声がやかましい。

栄治一家が来ている。

正造が健太に勉強を教えようとしているが、健太は遊びたい様子。

正造「待て健太。勉強の基本は音読だ。今の所をもう一回大きな声で読もう」

健太「ええー、もういいよ」

と逃げるように翔子の元に。

健太「お姉ちゃん、トランプやるう！」

翔子「よし、じゃあやろうか」

正造「(ため息) まあ、しょうがないか(立ち上がり) 図書館に行ってくる」

鈴江「いってらっしゃい」

栄治「父さん、頑張ってるみたいだね？」

正造「ああ。それより健太にしつかりと勉強させてやってくれ」

栄治と美紀、顔を見合わせ苦笑する。

栄治「ああ」

正造「いい大学に行って、いい就職をさせるって意味じゃないぞ。学問は人を正しく成長させるんだ」

正造、全員に向き直る。

正造「いいか、科学はエビデンスがすべて。学問を身につけることによって、科学的な物の見方ができるようになる。それは、公平で平等な物の見方ができるようになるってことだ。偏見や先入観を排し、科学的な事実であれば、それを受け入れる。それが正しい人間の在り方だと俺は思っている。

いいか栄治、俺は健太に、そういう大人になつて欲しいんだ」

栄治「う……うん」

正造「俺は科学の力を信じている。人類の未来は科学の力にかかっているんだ」

そう言つて正造はリビングを出ていく。

残された翔子や栄治たち。お互いの顔を見合わせちよつと驚いた表情。

○文政大学・構内

秋になり、銀杏の葉が舞っている。

その中を颯爽と歩く正造。

○同・図書館・閲覧席

数学の問題を解く正造。

教科書は高校の数学Ⅰになっている。

○松沼家・外（夜）

小雪が舞っている。

コートを着た翔子が足早に帰ってくる。

○同・リビング

正造が新聞とノートテーブルの上に拡げている。

そこに入ってくる翔子。

翔子「うーさぶ！ 雪になってきたよ！」

正造、嬉しそうに翔子を見ている。

正造「翔子、これ見えてくれ」

翔子「なに？（と新聞を見て）ああ公立高校の入試問題？ やって見たの？ で、どうだった？」

正造、満面の笑みで翔子を見ている。

翔子「（笑って）なによ？ もったいぶらないで教えてよ」

正造、黙ってノートを見せる。

翔子、そのノートを見る。驚いた表情。

そして次のページを見ていく。

翔子「凄い！ ほとんど満点じゃない！」

正造「（得意） どうだ」

翔子「いや、ホント凄いや、お父さん。入試だけなら日比野高校とかに行けちゃうレベル

ルだよ、これ。あそこ、上位の子は普通に
東大とか行ってるんだから」

正造「まあ、俺はやればできる男だからな」
と高笑いをしながら出ていく。

翔子、キッチンの鈴江と顔を見合わせ笑
いあう。

○文政大学・構内

桜が舞っている。

○同・図書館・閲覧室

正造が数学の問題を解いている。

教科書は数Ⅱ。

問題が難しいらしく頭を抱えている。

○同・入口付近・中

疲れた表情で正造がやってくる。

入口近くのラックに「生涯学習ハンド

ブック 文政大学」というのがある。

正造、それを手に取り、その場で読み始

める。

○文政大学・教室・外（日替わり）

入口に「生涯学習講座 数学の問題をど
んどん解く！」と張り紙がしてある。

○同・中

十五人ほどの様々な年齢層の男女が着席
している。

教壇には長髪にバンダナをした数学者、

秋山公平（58）が話をしている。

秋山「というわけで、この講座には講義とい
うものありません。ただもう自分のレベル
に合った数学の問題をひたすら解く。それ
がこの講座です」

× × × × ×

秋山がプリントをそれぞれの生徒に配っ
ている。何人かの生徒は顔見知りらしく、
親しげに話をしている。

そして、正造の所まで来て、

秋山「あなたは初めてですね？」

正造「はい。よろしく願います」

秋山、正造の顔をじつと見て、

秋山「この辺りの問題はいかがですか？」

とプリントを手渡す。

正造、問題を見るが、不思議な記号が並びチンプンカンブン。

正造「あの……もう少しやさしい奴を。できれば高校生レベルのものを」

秋山「ふむ……では、この辺りでどうですかな？」

と別のプリントを渡す。

正造「(見て)これなら……。あの、私のようなレベルの者が参加しても大丈夫だったのでしょうか？」

秋山「(笑って)何をおっしゃる。そのお年でこのような講座に参加するなんて素晴らしいことじゃありませんか。いいですか、学問とは人と較べるものではありません。勉強は、本来楽しいものなんですから」

正造「ハイ！」

秋山「解けたら私の所に持ってきてください。」

質問も、遠慮せずにどんどん聞きにきてください。いいですね？」

× × × × ×

正造が問題を解いている。

見ると、生徒たちが次々と秋山を訪ね答え合わせや質問をしたりしている。

正造、「よし！」という表情でバリバリと問題を解きだす。

○文政大学・教室・外（日替わり）

入口に「生涯学習講座 ギリシア神話を
読み解く」と貼ってある。

○同・中

講師の男性が教壇で話している。

講師「このホメーロスの二大叙事詩といわれる『イーリアス』と『オデュッセイア』は
ですね……」

生徒の中に正造がいる。食い入るように講師の話聞き、熱心にノートを取っている。

○同・大学構内（夕方）

秋。銀杏が舞っている。

夕日が赤く校舎や図書館を染めている。

楽し気に行きかう若い学生たち。

そんな光景を正造がじっと見つめている。

○松沼家・玄関・中（夜）

厚いコートを着た翔子が帰宅する。

正造の声「わかった！ もういい！」

という怒鳴り声が聞こえてくる。

翔子、慌てて中に飛び込んでいく。

○同・キッチン

翔子が飛び込んできて正造と打ち合う。

翔子「どうしたの？」

正造「うるさい、どけ！」

と翔子を押しよける。

翔子「ちよつと、なんなのよ！」

翔子、疲れた表情の鈴江に、

翔子「どうしたのよ、お母さん？」

× × × ×

翔子と鈴江がキッチンのテーブルについている。

翔子「(大きく) 大学？ 大学に行きたいって

どういうこと？ 今みたいな公開講座とか

じゃなくて？」

鈴江「(うなずく) ……」

翔子「じゃあ、本当に普通の大学生になりた

いって言ってるの？」

鈴江「(うなずいて) そんなこと言ったって、

今のやつならともかく……学費とか……

四年間も……ねえ？」

翔子「うん……確かに」

○寝室(夜)

布団が二つ並んで敷いてあり、それぞれ

に正造と鈴江が寝ている。

二人ともじっと天井を見ている。

正造「さつきは悪かったな」

鈴江「いえ」

正造「鈴江、学問の目的とは何だと思う？」

鈴江「さあ？ 前にあなたが言ってた、『公平で平等な見方のできる人間になるためのもの』なんじゃないの？」

正造「それもある。だが、真の目的は別にあるんだ。それは、まだ世の中にたくさんある『わからないこと』を解き明かす。それが学問の真の目的なんだ」

鈴江「……」

正造「世の中は、わからないことだらけだと
言ってもいいくらいだ。それを研究し、答
えを見つける。俺のやっている勉強は、そ
のための基礎作りにすぎない」

鈴江「……」

正造「俺が今、学んでいるのは、すでに答え
があるものばかりだ。とっくの昔に誰かが

答えを見つけたものだ」

鈴江、顔を向け、正造の表情を見る。

正造「だが、学問の真の目的はその先にある。

（熱く）未知の『何か』を解明する。それが学問の目的なんだ！」

鈴江「……」

正造「俺もその領域に行きたい。俺ならきつとできる。俺の頭脳をもってすれば、絶対にできるはずなんだ！」

鈴江、不審げな表情で上半身を起こす。

鈴江「あなた……？」

正造は静かに涙を流している。

正造「（強く）俺は大バカ野郎だ。人生の大半を無駄に過ごしちまった。俺は、何もなしとげていない。何もしないうちにこんな年寄りになっちまったんだ！」

鈴江「……」

正造「こんなことなら、いっそ学問の素晴らしさなんかには気づかなければよかった」

と言ってから、大きく息を吐き、

正造「いや、気がつけたのは、せめてもの幸
せか。いずれにせよ、時間がぜんぜん足り
ない。俺は、学問で社会や人類に貢献した
かった。もっと早く（声を荒げ）学問の素
晴らしさに気づきたかった」

ひくひくと呼吸を荒げながら正造は泣き
続ける。

正造の様子がどこかおかしい。そんな懸
念を持って、鈴江は正造を見る。

○同・キッチン（日替わり）

翔子と鈴江がいる。

翔子「泣いた？ お父さんが？」

鈴江「うん……泣いた……子どもみたいに」

翔子と鈴江、顔を見合わせ考えこむ。

○文政大学・構内

春。桜が舞っている。

新生生たちで構内は賑わっている。

その中を、リュックを背負った正造がせ

かせかと歩いている。

○同・図書館・閲覧室

正造が勉強に励んでいる。

近くで男の学生たちが小声であれこれ話をしている。

男子学生A「まじ？ ウソだろ、それ？」

男子学生B「ホントだって！ こんなことでウソついたって意味ねーし」

正造「(学生たちに)静かにできないものかな」
男子学生A「あ、すいません」

正造「ここは勉強をする場所だ。やる気が無いんだったら出ていってくれ」

学生たち、顔を見合わせると立ち上がり、出ていく。

正造「(その背中に) なんなんだ、いったい場所をわきまえろ。親の金で大学に来ていくくせに、勉強せんとは何事だ」

すでに男子学生たちの姿は見えない。

正造「勉強をしろ、勉強を。ここは勉強をす

る場所だ」

近くにいる女子生徒が正造を見て、

女子生徒「あの静かにしてもらえませんか？」

正造「俺が？ 俺がうるさいというのか？」

女子生徒「はい。私にはあなたも十分にうる

さいように思えますけど」

正造、周囲を見回す。

多くの学生が、正造を非難がましい目で
見ている。

○駅・プラットホーム（夕方）

正造が不機嫌そうな顔で立っている。

目を閉じ、繰り返し深呼吸をする。徐々
に落ち着いた表情を取り戻していく。

正造「よし」

とリュックから数学の問題集を取り出す
と、熱心にそれを読み始める。

○電車の中

座席に座り正造が熱心に数学の本を読ん

でいる。

網棚の上に正造のリュック。

○小田原駅・プラットホーム（夜）

正造が茫然とした表情で駅名を表示した看板を見上げている。正造はリュックを背負っていない。

そこに駅員が通りかかる。

正造「ここは小田原？」

駅員「はい」

正造「(呟く) 乗り換えたということか……」

駅員「はい？」

正造、クスクスと笑いだす。

駅員「どうしました？」

正造「君、なんとかいう数学者を知っているかね？」

駅員「いや……あの、それだけでは」

正造「(構わず) その数学者はな、問題に夢中になるあまり……えっと、なんかを忘れたんだ。なんだったかな、君、知らないか？」

駅員「いや、私は……」

正造、高笑いをする。

正造「エピソードだけなら俺も過去の天才並みだな」

駅員、不思議そうな顔で正造を見ている。

正造、突然慌ててたように辺りを見回し、

正造「君、私のリュックを知らんか？」

駅員「いえ」

正造「本当かね？ まさか、君が取ったというわけじゃないだろうね？」

駅員「ハア？ まさか！」

○駅事務所・中（夜）

鈴江、正造がいる。

鈴江、駅員らにペコペコと頭を下げ、

鈴江「いろいろ申し訳ありませんでした」

駅員「(笑って) いえいえ。あと、荷物が出てきましたら、こちらから連絡しますから」

鈴江「よろしくお願いします」

と頭を下げる。

鈴江「さあ、お父さん、行きましょう」

正造、返事をせずに茫然と立っている。

鈴江「お父さん？ どうしたの？」

正造、我に還って、

正造「な、なんだ、どうした？」

鈴江「なんだじゃありませんよ。さあ、行き
ましょう」

正造「あ……ああ」

○松沼家・リビング

正造、翔子、鈴江がいる。

正造「(大きく)なんで俺が病院に行かなきゃ
ならんのだ！」

翔子「だから念の為よ、念の為」

正造「何の念を入れるんだ？」

翔子「だから……ほら、お父さん、最近、物
忘れとか多いじゃない」

正造「だから何だ！ 大学レベルの数学を解
く俺がボケてるとでも言うのか。冗談じゃ
ない！」

翔子「じゃあ、昨日のことはどうなのよ？
いくらなんでも小田原まで行っちゃうってお
かしいじゃない。しかも、リュックやお財
布まで失くしてさ」

正造「だからそれは何度も説明したろ。問題
を頭の中で解いていたんだ」

翔子「それにしたって——」

正造「いい加減にしろ、不愉快だ！」
とリビングを出ていく。

翔子と鈴江、顔を見合わせ、

翔子「ごめん、あたしの言い方が悪かったの
かも」

鈴江「(ため息) 困ったもんだねえ」

○歩道

手提げのバックを胸に抱え、正造が厳し
い表情で歩いている。

× × × × ×

歩き続ける正造。

クラクションを鳴らされ我に還る。

正造は、片側二車線の幹線道路の横断歩道上中央にいた。

歩行者用信号は赤。

慌てて中央分離帯に避難する。

左右をたくさん車の車が走り抜けていく。

驚愕の表情で正造は、走り抜ける車を見送る。

○書斎（深夜）

正造がパソコンに向かっている。

画面は『認知症セルフチェック』。

当てはまる項目に☑を入れるようになって
いる。

『生き甲斐を感じない』を見て、

正造「笑って）感じるとも。大いに感じるよ」

『根気が続かない』の項目。

正造「続くなあ。いくらだって問題を考え
られるよ」

『身だしなみに無頓着になる』

正造、自分の下半身を見る。

ズボンのファスナーが開いている。

正造、慌ててそれを上げ、

正造 「まあ、これくらいはな……」

とチェックをせずに次の項目に。

『自宅の方向がわからなくなる。迷う』

正造 「…… (チェックしない)」

『独り言や同じ言葉の繰り返しが目立つ』

正造 「独り言や同じ言葉の……」

途中でそれ自体が独り言と気がつき黙る。

『相手の意見を聞かない。必要以上に頑

固になる』

『物をよく失くす。また、それらを人が

盗んだのではと疑う』

マウスを持つ手がブルブルと震えだす。

正造 「バカバカしい。こんなもの！ バカバ

カしい！」

と画面を変えようとするが、手が震え、

矢印（マウスポインター）がうまく目的

の場所にいかない。

○松沼家・玄関・外

正月。門松やしめ飾りが飾ってある。

○同・リビング

翔子、鈴江、栄治、美紀がいる。

離れて健太がカルタの準備をしている。

栄治「ボケてる？ 父さんが？」

翔子「（声をひそめ）声大きい」

栄治「（小さく）だって（美紀を見て）なあ？」

美紀「……心当たりとかあるの？」

翔子「うん。（鈴江を見て）ねえ？」

鈴江「（うなづく）……」

健太、床にカルタを並べ終える。

健太「お姉ちゃん、カルタやろうよ！」

翔子「ちよつと待って。今、大切なお話し

るから」

健太「ちえ（と不服そうな表情）」

栄治「（翔子に）だとして、どうするつもりだ？」

翔子「だから、とりあえず医者に行って診て

もらおうと思って。お兄ちゃんに説得して

くれないかな？ あたし、この前失敗し
ちゃったんだよね」

健太がつまらなそうな顔。そつと立ち上
がりリビングを出ていく。

○書斎・中

正造が机に向かい勉強をしている。
後ろのドアがそつと開き健太が顔を覗か
せる。

健太「ねえ、おじいちゃん、遊ぼうよ」

正造、振り返り、

正造「なんだ、健太か。だめだよ、おじいちゃ
んは忙しいんだ」

健太「なにしてんの？」

正造「勉強だ。お前も勉強したらどうだ」

健太「いいよ、勉強なんて。ねえ、カルタや
ろうか？」

正造「いや健太、俺は勉強をするんだ。だか
ら邪魔をしないでくれ」

健太「えー、ねえカルタやろうよ！」

正造「ダメだ。さあ、あっちに行つててくれ」

健太「(大きく)ヤダ！ ねえ、勉強なんかい
いから遊ぼうよ！ ねえったら！」

と正造の背中を叩く。

健太「じゃあ、かくれんぼしようよ、ねえ、
おじいちゃん」

正造、黙っているが、頭の中では健太の
言葉がわんわんと反響している。

健太「ねえ、聞いてんの！」

と再び正造の背中を強く叩く。

正造「うるさい！ 勉強の邪魔をするな！
と健太を突き飛ばす。

健太は壁にぶつかり大声で泣きだす。

正造、立ち上がると健太の両肩を掴み、
激しく揺さぶる。

正造「俺の邪魔をするな！ 時間がないん
だ！ 出てけ！ この部屋からすぐに出て
いけ！」

と健太を揺すり続ける。

翔子の声「何してんの！」

と翔子が飛び込んできて、正造を健太から引きはがす。

続けて栄治、美紀、鈴江もくる。

翔子「何してんのよ、お父さん！」

美紀「(同時に) 健太！」

と健太を抱きしめる。

翔子「お父さん、健太に何したの？」

正造「何って……お、俺の勉強の邪魔をするから……」

翔子「だから、こんなことしたの？ 自分のことをよく見てみなよ！」

正造、泣いている健太を見る。

正造「……」

翔子「聞いているのお父さん！」

正造「……」

翔子「ねえ、返事してよ！」

正造、翔子を見る。その表情は弱々しく、何かに怯えているよう。

○宇田川総合病院・全景

○同・脳神経外科・診察室

医師、斎藤孝（48）がいる。

向かい合って正造、その後ろに翔子と鈴江がいる。

全員が正造のMRI画像を見ている。

正造「認知症ですか……私が？」

斎藤「軽度の、です。初期のアルツハイマー型の認知症です。（画像を指差し）この部分に脳の委縮が見られます」

正造「バ……バカな」

と席を立とうとする。

翔子「お父さん、先生の話を聞こうよ」

と正造の腕を掴む。

正造、それを振り払い、歩きだす。

翔子「お父さん！ どこ行くの？」

正造「帰るんだ、バカバカしい。帰って俺は勉強をする。大学レベルの数学を解く男だぞ、俺は。俺がボケるわけがない！」

と診察室を出ていってしまふ。

翔子「（斎藤に）すいません」

と正造の後を追う。

○同・受付付近（※冒頭と同じシーン）

正造が憤然とした表情でズンズンと歩いてくる。

他の人にぶつかりそうになると、乱暴に押しつけ、そのまま病院の出口に向かう。後を追って翔子。

翔子「お父さん、ちよつと待ってたら！」

翔子、追いついて正造の腕を掴む。

翔子「ねえ、待ちなよ！」

正造、無言で翔子を振り払い、自動ドアから出ていく。

翔子「なんなのよ、もう！」

○同・自動ドア・外

翔子が出てくる。

歩き続ける正造の後ろ姿が見える。

翔子「(大きく)勉強なんて全然意味が無かったじゃん！」

正造、立ち止まり振り返る。

翔子「今まで、やってきたことはなんだったの？ お父さんが今までやってきたことはなんだったのよ！」

正造の表情が悲しげに歪む。

翔子「受け入れようよ！ 事実をちゃんと受け入れようよ！ 初期なら対策は立てられるんだからさあ」

正造、無言のまま背を向け歩きだす。

翔子「(泣き声)……お父さん」

そこに鈴江がくる。鈴江は、そのまま翔子の横をすり抜けると正造を追いかけいく。

○同・病院庭

ズンズンと歩く正造。

背後から鈴江が走ってくる。

鈴江「(大きく)あなた！」

振り向く正造。息を切らし、必死に走ってくる鈴江の姿が見える。

正造「鈴江……」

鈴江、追いついて、

鈴江「(息を切らし)ハア、疲れた。少し休み
ましょうよ」

とニコリと微笑む。

× × × ×

病院庭のベンチに、正造と鈴江が並んで
座っている。

正造「バカバカしい。俺がボケているなんて。

あの医者はどうかしている」

鈴江「(笑顔)……」

正造「時間が無いんだ。俺は、もっと勉強し
なけりゃならん。俺は、学問で社会に貢献
するんだ。俺にはできる。俺にはそれがで
きるんだ！」

鈴江、そっと正造の手を握る。

正造「……俺は(頭を抱え)俺はボケてなど
いない！」

鈴江「(笑顔)……」

正造、泣いているように見える。

正造 「俺は、ボケてなど……」

鈴江 「かぶせて」科学はエビデンスがすべて」

正造、驚いて鈴江の顔を見る。

鈴江はニコニコと正造を見ている。

鈴江 「あなた、前にそう言ってたでしょう？」

正造 「……」

鈴江 「偏見や先入観を排し、科学的な事実で

あればそれを受け入れる。それが人として

正しい姿なんだって」

正造、辛そうに頭を抱える。

鈴江 「エビデンスがすべて——」

と言ってからクスクスと笑い、

鈴江 「でもその後で翔子に『エビデンスって

なに？』って聞いちゃった。『証拠』って

意味なんだってね」

正造、それを聞いて軽く嘔き出す。

鈴江、正造の手を優しく撫でる。

二人、見つめ合い、

正造 「俺は……ボケているのか？」

鈴江 「軽度の、です。軽度の認知症。お医者

さんがそう言ってたでしよう？」

正造 「そうか……」

と悲し気に空を見上げる。

正造 「……結局、俺はなにも成し遂げることができないということか」

鈴江、キツとした表情になり、

鈴江 「(強く) あなたはもう、たくさんのことを成し遂げている！」

正造、顔を上げ、鈴江を見る。

正造 「俺が……何を？」

鈴江 「あたしと結婚して、二人の子供を立派に育てあげたでしょう。素晴らしいことじゃない。それともあたしとの結婚は、あなたにとって意味の無いことだったの？」

正造 「……いい、いや」

鈴江 『俺は人生の大半を無駄に過ごしてしまった』。あなた前にそう言ったでしょう。あの時、あたし悲しかったあ。ああ、この人にとって、あたしや子供たちのことは意味が無かったのかって」

正造「バカ……そういう意味で言ったんじゃない……」

鈴江、正造の顔をしっかりと見て、

鈴江「(力強く) あなたはたくさんのことをちゃんと成し遂げている。あなたは金沢重工業の溶接マイスターだった人でしょう。会社にたった二人しかいない技術指導者だったじゃありませんか」

正造「(笑って) そうか……確かにそうだったな」

鈴江「俺が溶接したものは世界中にある。いつもそう自慢してたでしょう」

正造「(うなずき) ああ、ある。補修さえちゃんとやりやあ、何百年だって持つ」

鈴江「でしょう？ あなたは、もうたくさんのものを残してる」

正造「そうか……うん、そうだな」

突然、ガバッと正造が立ち上がる。そして駆け出すと背伸びをし、あたりを見まわす。

鈴江、驚いて後を追い、

鈴江「どうしたの？」

正造、かまわずベンチの上に立ち、周囲を見まわす。そして嬉しそうに遠くを指差し、

正造「鈴江、見ろ！」

鈴江「どうしたの？」

正造「いいから！ ここにあがって！」

鈴江、ベンチの上に立つ。正造が差す方に視線をやると、海に架かる大きな鉄橋が遠くにかすんで見える。

正造「あの橋を作ったのは俺だ。俺が工夫して作った自動溶接マシンで、あの橋を溶接したんだ」

と誇らしげに言う。

正造「あれは会社からも表彰された。今でも俺のやり方で、みんな溶接してるはずだ」

鈴江、嬉しそうな表情。そして、遠くの鉄橋を見ながら、

鈴江「科学の力を信じるのが大切」

と言って正造を見てニコリとする。

鈴江「あなた、こうも言ったよね？ あたしは信じてますよ、科学の力。あなたは信じないの？」

正造「(苦笑) バカ言うな。信じてるよ。当たり前だろう。科学の発展なくして人類の平和などありえん」

鈴江「じゃあ、ちゃんと先生の言うことを聞こうよ。初期の認知症は、ちゃんと薬を飲んで、お医者様の言いつけを守れば進行を遅らせることができる。あたし、ちゃんと調べたんだよ、これ」

正造と鈴江、顔を見合わせ笑い合う。

正造「そうか。(うなずいて) うん、そうだな。

俺は、俺の体を使って科学の力を体験してみるとするか」

鈴江「そうよ、その意気よ。二人で頑張っていこうよ」

と正造の手を両手でしっかりと握る。

正造「ああ」

と両手でしっかりと握り返す。

○病院・入口付近

翔子がいる。

そこに栄治が駆けつけてきて、

栄治「悪い、遅くなった。父さんは？」

翔子、笑顔で視線を病院庭に送る。

そこにはしっかりと手を握り合う正造と

鈴江の姿が見える。

翔子「笑顔」やっぱり最後はお母さんだった」

○病院庭

正造「(突然) そうだっ！」

鈴江「どうしたの、急に？」

正造「記録を残そう！ 俺の痴呆の進行を記

録するんだ！ 鈴江、ほら、あの学者を知っ

てるか？」

鈴江「(笑って) あの学者って言われても」

正造「ほら、あれだよあれ。腹の虫だ。なん

て言ったっけ？ ほら？」

鈴江「腹の虫？ 『腹の虫が収まらない』とか、そういうこと？」

正造「（もどかしそうに）そうじゃなくて本当の虫だ。腹の中にいる奴だ！」

鈴江「回虫のこと？」

正造「（大きく）そう、それ！ なんとかいう日本の偉い学者が、外国で、その回虫の卵をわざと飲み込んだんだ」

鈴江「（呆れて）なんでそんなことを？」

正造「日本に持ち帰るためだ！ 手続きやらなんやら大変だから、それならっていうことで、そいつの卵を飲み込んだんだ！」

鈴江「はあ……で……どうなったの？」

正造「そのまま日本に帰って、腹の中で回虫を育てたんだ。どんな症状が出るか、自分の体を使って、ぎりぎりになるまで自分で体験したんだ！」

正造、空を見上げる。

空には雲一つない青空が広がっている。

正造「やるぞ！ 俺もやるぞ！ 俺の痴呆の

進行を、俺自身が記録していくんだ！」

と両手を大きく拡げ、天に向かって叫ぶ。

正造「見てろ！ 俺はやる！ そうやって少しでも科学の進歩に貢献してやるんだ！」

○病院・入口付近

翔子と栄治が不思議そうな顔で、天に向かって吠えている正造を見ている。

栄治「ホントに父さん、大丈夫か？」

翔子「（首をかしげ）うん、多分……」

○松沼家・全景

遠くに鯉のぼりがはためいている。

○同・リビング

翔子と健太がトランプの神経衰弱をやっている。

勝負は健太がかなり有利に進めている。

離れて鈴江、栄治、美紀がいる。

栄治「じゃあ、父さん、かえって張り切って

る感じなんだ」

鈴江「苦笑」あれ、張り切ってるって言うのかねえ」

翔子、神経衰弱をやりながら、

翔子「超張り切ってるじゃない。なんでもさ、家族や医師が残した記録はたくさんあるけど、患者本人が残した記録はほとんど無いんだって。だから、俺が残して少しでも社会に貢献するんだって大張り切りしてるよ」

栄治「なるほどね」

翔子、カードを一枚めくる。しかし、数字は合わない。

翔子「あれ、これじゃなかったっけ？」

健太、ニコニコしながらカードを次つぎと揃えていく。健太の圧勝。

健太「勝った」

翔子「恐るべし子供の記憶力」

健太「お姉ちゃん、もう一回やろうか？」

翔子「えー」

と言いながら、さりげなく栄治たちの所

へと近づく、

翔子「(小声)それでき、自分でいろいろ調べて専門のお医者さんのところに通い始めたのよ」

美紀「へー」

鈴江「ボランティアの患者だとか言ってるの。自分の体でいろいろ試してもらって構わないとか申し出たらしいの」

栄治「それも科学の進歩に貢献するってことか」

翔子「しかもさ、あたしにも協力しろとか言ってくるのよ。(小声で)なんでもさ、アルツハイマー型の認知症を発症しやすい遺伝子っていうのがあるんだって。自分の遺伝子を調べてみて、もしそれがあつたら、今のうちからお医者さんと協力しているいろいろやってみるとか言ってくるのよ」

美紀「でも、それってちよつと怖いね」

翔子「でしょ？ そんな遺伝子情報知りたくないって、こっちは。だから、英語の勉強

が忙しいからって断ってんのよ」

栄治「なんだ、また英語始めたのか？」

鈴江「もう一度、翻訳家を目指すんだって」

翔子「まあ、ホントはお父さん見てたら、あたしも、もう一度、やりたいことやってみようかと思っただけさ」

健太が翔子に飛びついてきて、

健太「ねえ、お姉ちゃん、僕も英語の勉強したい！」

翔子「よし、じゃあおじいちゃんのとこに行つて教えて貰おうか？」

健太、少しだけ怯えた表情をする。

翔子「(笑って)大丈夫だって。おじいちゃん、すっごく勉強できるんだよ。なんでも教えてくれるからさ。行ってみようよ」

○同・書斎・中

『己をもって社会に貢献する』と大きく書いた紙が壁に貼ってある。

正造はパソコンに向かいキーボードを叩

いている。

画面に正造の打った文字が現れる。

それに正造の声が重なり――、

正造の声「五月五日。アリセプト3mg服用。

むかつきなどの副作用なし。記憶力に関しても問題ないように思える。インターネットによる英語ボキャブラリーチェックも一万七千語レベルを維持……」

背後の開いたドアから翔子と健太が正造の後ろ姿を見ている。

笑顔で正造の背中を見る翔子。

健太は不思議そうな表情。何かを言いたそうに口を開きかけるが、それより早く翔子が指を口に当て、

翔子「(小さく) しっ」

と合図する。

そして、そっとドアを閉める。

○書斎・外

翔子「(小声) おじいちゃんは今、勉強の最中

だから、やっぱり姉ちゃんが英語教えてあげるよ」

と健太を連れ、静かに歩きだす。

○書斎・中

正造がパソコンに向かいキーボードを叩き続ける。

生き生きとした表情。

キーボードを叩く正造の背中。

その姿がとてつもなく大きく見える。

終わり